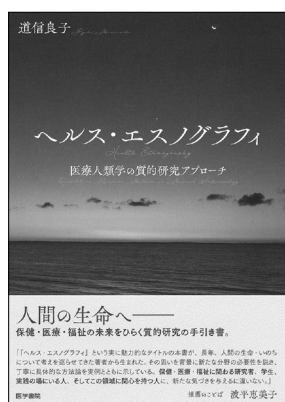


Book Review

ヘルス・
エスノグラフィ
医療人類学の
質的研究アプローチ
著：道信良子



A5判・320ページ
定価：3,520円
(本体3,200円+税10%)
発行：医学書院 (03-3817-5650)

フィールドで考え、 人びとの理解と自己変成を 生み出す研究

評者

西村ユミ

東京都立大学大学院人間健康科学研究科看護科学域教授

本書の書名でもある『ヘルス・エスノグラフィ』は、医療人類学を専門とする著者、道信氏が、保健・医療・福祉系の教育や研究活動に携わる中で生まれた知見を体系化した、新しい質的研究の方法論である。それゆえ、著者が行なった調査、例えば「離島の子どもの身体観・健康観・医療観と医療環境とのかかわりに関する人類学的研究」などの事例が多く挟まれ、方法のレッスンを受けているような感覚で読み進めることができる。最終章では、著者による16余年のタイでの調査であり、本方法を生み出すきっかけにもなった「企業におけるHIV/AIDS対策の推進」が紹介される。著者は、この研究と重なる時期から、自らの研究の軸を医療や生命にかかわる内容へと転換させた。その中で、古典的な人類学とは違った、フィールドの課題の特徴や研究成果の還元までのスピードを体感し、人間の生命を尊び、健康と幸せを希求するもう一步踏み込んだ行為や活動が研究に含まれること、そして、現場の人びととの間で課題と目標を共有することの必要性を考えさせられ、本方法の提唱に至る。

何よりも著者がこだわるのは、人類学の伝統でもある「世界の人びとが生きている場」「生命と周りの地(環境)」である「フィールド」に入り込み、そこで共に暮らしつつ考え、「生」を統合的に記述することである。フィールドワーカーは、「世界の健康問題の全体を見る視点」と「(小さな)日常の出来事に関心をよせる視点」の両方を持ち、専門領域特有の解釈枠組みを自由な発想で外し、調査の「過程」で「メタモルフォーゼ(自己変成)」の経験をする。「研究者の態度や信念を内側から壊されるような感覚を伴う試練の場」としてのフィールドで考え、新たなものの見方を養われて初めて可能になるのが、ヘルス・エスノグラフィなのである。そのため、本方法は、過程であり成果でもあるのだ。

本書はとても丁寧に編まれ、また贅沢な構成となっている。ヘルス・エスノグラフィの視点の紹介に続く、第2章「フィールドワーク」では、フィールドへの入り方から倫理的配慮までもが視野に入れられる。その後に配置される「インタビュー」「ナラティブインタビュー」では、各方法が哲学的前提の違いとともに紹介される。「参与観察」では、観察がいかなる営みであるのか議論され、「質的分析」では、著者の具体例が詳述される。後半には、ヘルス・エスノグラフィによる探究を支える2つの理論「システム」と「ナラティ

ブ」が、歴史的展開とともに両者の関係も含めて論じられる。評者は、医療現場で調査を行なってきたが、本書を辿ると、これまでいかに1つの視点に縛られていたのかを痛感させられる。

各章には、葛藤や課題も数多く盛り込まれている。そもそもフィールドワーカーは、現地の人びとにとって「外部の人間」であるにもかかわらず、「内部の人間」としても認められる不安定な立ち位置にある。この矛盾を引き受けつつ、立ち位置を吟味することには終わりが無い。倫理的配慮では、医学や看護学の依って立つグローバルな倫理原則と、発展途上国などに入りこむ人類学の人権擁護の方法や考え方の不一致が取り上げられる。例えば、途上国では規制を敷くための研究環境や人材育成は不十分であり、医療者と患者、研究者と参加者との関係も、個人の自律性を前提としているわけではない、という。この不一致のもとで、著者自身も大きな葛藤を経験したことであろう。が、これこそが、フィールドで考えるフィールドの倫理である。ナラティブインタビューの真実性、インタビューや観察における記憶と記録の課題も浮き彫りにされる。質的分析では、著者自身の分析を捉え直す必要性が論じられる。こうした課題を浮かび上がらせて自己吟味し、方法を練り直すこと自体が、ヘルス・エスノグラフィであるのかもしれない。

本書を読んでいたら、フィールドに行きたくなってきた。いや、フィールドに身を置き、もっと考え、気づかずにいた葛藤に自身を曝したくなった。驚いたことに、著者の試行錯誤が読み手のそれを触発してくるのだ。本書の一言一句に、著者の膨大なフィールドワーカーとしての経験と、そこで考えてきたことが詰まっているためであろう。ヘルス・エスノグラフィは、新しい方法であり、かつ私たちを生命のフィールドへ誘うフィールドのリアリティである。